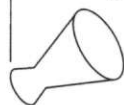


なかまを応援しよう!!

自立を目指して中区のいろいろな場所で活動しています。仲間とのコミュニケーションを大切に、商品の作成、販売と社会参加を目指しています。みなさまのご協力をお願いします。



第一もみじ作業所

(知的障害者授産施設)

第二もみじ作業所

(生活介護事業所)

障害者のねがいを大切に、自立をめざして誕生し、発展してきた「もみじ作業所」二舟入もみじ作業所「がんばる作業所」三作業所が一緒にいることで、より豊かな働く場作り、生活する場作りを目指そうと誕生したのが「社会福祉法人もみじ福祉会」です。

聴覚障害に加えて、他の障害を併せ持つ仲間が、生き生きと働ける場として誕生しました。手話や触手話などコミュニケーション手段を通して、仲間を作り、お互いに成長しながら、豊かな生活を築いていけるよう頑張っています。地域の方々や関係団体の皆さんに支えられ、地域に開かれた作業所を目指しています。

広島ろう重複障害者

アイラブ作業所

Tel 二四八〇三三六

ここに来たら、仲間がいっぱい。ほんの少しの成長もよこごびあえるみんなの居場所。働くことを通して、社会の一員であることを実感し、目的を持って生きる事ができるそんな場所をめざします

作業所わくわく

Tel 二四三三二四一八

自主製品づくり(ビーズ製品) 絵の時間(創作活動)・昼食会と いろいろな活動があり、いつもワクワク・ここにここでハッスルしてます!!

みんなの働く場 いっぱい

(視覚障害者共同作業所)

Tel 二四七〇〇五八

わたしたちの作業所「いっぱい」では、土のう袋などの内職をしています。視覚障害など、障害者理解のための講師なども引き受けて



誰も損をしない福祉の構造

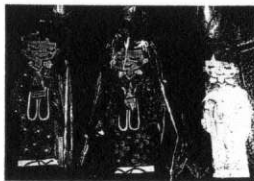
で結ぶネットワーク

(森浩昭氏の講演より)

従来の、寄付など金銭的な面で企業が作業所を援助したり支えたりするというのが福祉だという考え方は、中小企業は社会福祉に貢献し続けるゆとりがない。しかし、もの作りや製品販売であれば、多大な社会貢献ができる」と森氏は言

喜ばれ必要とされて良く売れる製品を創出するには、どのようにすればよいかという企業の

の発想を取り入れて製品を作り、世に送り出して、障害者の能力を世の中に認めてもらうようにしていくことが



かまぼこ板組工 (メモスタンド)

大切ということであろう。作業所で品物を作る際の問題点として、販売ルートが確立していないため、原材料にお金をかける事ができない。パッケージで販売しても売れ残る。作業所間で真似て同じようなものを造る。自主製品の開発が難しく、企業の下請け作業が主で、納品までの期間が短い仕事は請けられない。独自のネットワークが不足している、仕事が見つかり難く、企業も作業所が何ができるのかわからない、などがある。資金やアイデア、技術力、ネットワークの不足に対しては●廃品活用による、初期投資を心配しないもの作りを考える。パズルをオーダーメイドに切り替えることで、売れ残りの無駄をなくす●相手の立場に立ち、企業にも利益になる相互協力を求める。金銭的支援が難しい企業には、物や技術といった物理的な支援をお願いする●企業が福祉に参画する



布おもちゃ (お弁当)

ことにメリットを持たせ、企業間のネットワークやマスコミを利用することにより、情報収集や仕事の斡旋を行う。特にマスメディアの有効活用は大きな力となる。そこではアイデア・企画・製造・販売いずれの段階においても、福祉作業所と行政や企業を結びつけるコーディネーターが重要になる。森氏によれば、企業と作業所とのあるべき関わり方は「どちらかの主導による関わり」ではなく、企業と作業所がよく理解しあって到達する「共生の関わり」である。森氏は今後の福祉のあり方として、誰も損をしない、おたがさまをキーワードにした「福祉という言葉を使わない福祉の構築をめざすことを提唱している。

すなわち物を作り、その作ったものを

特定非営利活動法人 エポケイ

Tel 二二二二八七八

現在、精神障害者・知的障害者が15〜16名通っています。盆灯籠やしめ縄飾り作り、ペットフード販売拠点の提供など各種活動を頑張っています。

販売とは別にクッキーを作った茶話会を開いたり、コミュニケーションも大事にしている作業所です。

特定非営利活動法人 エス・アイ・エヌ

Tel 二四七〇〇三二

協働カンパニーステップ

私たちは、果の施設やマンション・駐車場の清掃、神社やお寺の庭の草とり・ワックスがけなどの清掃作業を中心に仕事をしています。



小規模作業所

「レッツワーク雇用支援」

Tel 二三四一五五六七

職業生活における自立を図るために必要な、労働習慣や職業能力及び基本的な生活習慣を身につけることを目的としています。

広島市及び近郊に在住する障害者で、自力で通所できる方、広島地域障害者雇用支援センター修了者または退所者で、引き続き一般の事業者で働くための準備訓練を希望する方が入所されています。

売り利益を上げるところは企業でも、福祉作業所でも同じである。

企業では、作ったものが売れるか売れないかは死活問題である。心血を注いで改良を加え、作る製品に心を注ぎ、製作に取り組む。売る側も売れるように同様な苦心を重ねている。そうした取り組みから生み出され蓄積された様々なノウハウのいくつかを、福祉作業所での取り組みに生かされると森氏は指摘する。

森氏の福祉活動において、マスコミ活用や行政の協力は大きく、自身の幅広い人脈の活用も重要な柱となっている。森氏は、これらが大量退職する団塊世代の優秀な人材に福祉活動に積極的に参加してもらうためにも、民生委員が地域の人材や福祉施設や行政を結びつけるコーディネーターの役割を果たしていくことが重要になると強調して講演をしめく

※講演は、六月三日(火) 障害者福祉部 会研修会として行われたものです。 ※講師の森浩昭氏は、昨年第四回精神障害者自立支援活動賞(通称・リリィ賞)を受賞されています。